

## 中堅保健師が行う保健事業の展開における課題 : PDCAを用いた事例検討をととして

著者	室岡 真樹, 野崎 愛, 本間 祐美子, 目黒 里江子, 山口 真希, 平澤 則子
雑誌名	看護研究交流センター活動報告書
巻	28
ページ	75-78
発行年	2017-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/00001391">http://hdl.handle.net/10631/00001391</a>

## 中堅保健師が行う保健事業の展開における課題 ～PDCA を用いた事例検討をとおして～

室岡真樹<sup>1)</sup>、野崎愛<sup>2)</sup>、本間祐美子<sup>3)</sup>、目黒里江子<sup>4)</sup>、山口真希<sup>5)</sup>、平澤則子<sup>6)</sup>

1)新潟県庁人事課 2)新潟県庁健康対策課 3)新潟県庁高齢福祉保健課  
4)魚沼地域振興局健康福祉部 5)村上地域振興局健康福祉部 6)新潟県立看護大学

キーワード：中堅保健師，PDCA サイクル，事例検討

### 研究目的

地域における保健師の活動指針(2013)では、保健師の保健活動の基本的方向性として「地域診断に基づく PDCA サイクルの実施」が明記され、保健事業を実施するうえで PDCA サイクルを回すことが重要視されている。しかし、それぞれの段階がうまく繋がらなければ、地域特性に応じた事業展開ができず、自身の活動に成果も感じられず、自信も持てないのではないかと考えられる。

本研究においては、県中堅保健師が行う地域特性に応じた事業を PDCA サイクルにより評価し、課題の整理を行う。それにより県中堅保健師が、地域特性に応じた事業展開ができ、自信をもって活動できるために必要な支援を検討する。

### 研究方法

#### I 研究対象

A 県の本庁及び保健所に所属する中堅保健師(10～15年目程度)4名の実践事例

#### II 研究期間

平成 28 年 10 月から平成 29 年 2 月まで

#### III データ収集方法

実践事例について研究参加者で各回 1-2 例ずつ、1 事例 60-90 分で計 3 回の検討会を行った。検討会では事例提供者が事例の選択理由、実施経過と困ったことや悩み等について報告した後、課題を検討した。検討内容は参加者の同意を得たうえで IC レコーダーに記録した。

#### IV データの分析方法

記録したデータはすべて逐語録化し、PDCA サイクルの各段階に沿って、文脈が損なわれないよう課題を抽出した。抽出したものは短文にまとめ、意味内容によって分類し、その内容から順次抽象度をあげサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。カテゴリー化の際には、参加者全員で意味内容を確認し結果の信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### V 倫理的配慮

研究の実施に先立ち、研究対象者に対し、口頭で研究の趣旨を説明するとともに、プライバシーの保護及び研究への協力はいつでも中止できることについて伝え、研究参加について文書で同意を得た。また、各研究参加者にはそれぞれの上司に本研究内容とそこへの参加並びに事例を提供する旨について口頭で説明し、了解を得てもらった。

### 結果

#### I 事例の概要

事例の概要は表 1 に示すとおりである。

表1 事例の概要

テーマ	事業の目的
A 思春期保健対策	思春期世代が正しい知識を身につけ、適切な相談・支援を受けながら望まない妊娠及び性感染症等を予防できる。
B CKD(慢性腎臓病)対策	保健指導を実施する保健師・栄養士等の資質向上と指導技術の平準化を図り効果的な指導実施及び指導体制の構築を図る。地域内の連携システムを構築し切れ目のない支援により発症予防につなげる。
C 難病患者医療ネットワーク事業	神経難病患者レスパイト入院先増加に向けた取組をすすめる。そのため、神経難病患者の入退院調整や支援の現状と課題の整理を図る。
D 若年性認知症支援コーディネーター設置事業	若年性認知症の人の視点に立った対策を進めるため、若年性認知症の人やその家族からの相談窓口を設置するとともに、そこに若年性認知症支援コーディネーターの配置を進める。

## II 分析結果

「P：計画」「D：実施」「C：評価」「A：改善」の段階ごとに課題を整理した(表2)。「P：計画」では、32個のコードから14個のサブカテゴリー、4個のカテゴリーが生成された。「D：実施」では、14個のコードから7個のサブカテゴリーと2個のカテゴリー、「C：評価」では、8個のコードから4個のサブカテゴリーと2個のカテゴリー、「A：改善」では、23個のコードから16個のサブカテゴリーと7個のカテゴリーが生成された。カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉で示した。

「P：計画」段階では【現状把握】や【目的・目標の設定】等、「D：実施」段階では【関係者・関係機関との連携】についての課題が多く挙げられていた。「C：評価」段階では【実施した結果の整理】【評価方法】についての課題が出されていた。「A：改善」は、PDC段階で出された課題の解決につながるような内容として【現状整理を丁寧に行う】【関係者と目指す姿を共有する】等が出された。他に、【保健師として方向性、目指す姿を整理する】【保健師の役割を意識する】という課題も出された。

表2 PDCAの各段階における課題

カテゴリー	サブカテゴリー		
P 計画	現状把握	現状把握をして整理する必要がある 把握した現状を言語化する 現状把握をしこれから成すべきことを考える それぞれの関係者の思いを十分に聞く 引き継いだから、やれと言われたからではなく自分自身で現状を確認する	
	現状把握後の課題整理	周りが課題といっているということだけで課題とはせず十分に考える 関係者の思いを聞いたうえで課題の整理につなげる 地域特性を意識した課題整理を行う	
	目的・目標の設定	最終的にどこが望ましいのか(到達したいかを考え)目標設定する 中長期的目標設定を立て、それに基づいて実践につなげる 納得した目的・目標の設定ができる 評価を意識して目的・目標を設定する	
	評価指標の設定	目に見える数値的評価を設定する 関係者と相談しながら評価指標を考える	
D 実施	実施している展開方法・進め方	事業と事業をつなげながら展開していく 進めたい方向性にそった実施計画を展開できる 関係者に事業、やっていることを共有して進めたい 関係者同士をつなげる	
	関係機関・関係者との連携	保健師として関係者に何を期待したいかを明確にする 必要であれば新たな関係者を巻き込む 事業の方向性を関係者に伝える	
	C 評価	実施した結果の整理・表現	最終的な目的を意識して評価を行う 評価した結果を伝える
		評価方法	目標にそったアンケート(評価方法)を実施する 評価指標に添った評価が行えるような指標・方法を考える

A 改善	現状の整理を丁寧に行う	地域に出向いて現状を把握する 地域の現状・課題を整理・表現できるようにする 関係者の思い、実施できているところとできていないところを整理する
	(地域の) 目指す姿を関係者と共有する	目指す姿を関係者と考える 目指す姿を関係者間で共有する 目指す姿に向けた取組をすすめるために協力を求める
	継続を見据えて評価指標を具体化する	継続してみれる指標を設定する アウトカムが何かを考えていく
	成果を共有しながら継続した取組につなげる	成功事例を共有し積み重ねる 事例を振り返り、できたことできないことを検討・共有する
	つまずきや違和感をそのままにしない	あれ?と感じた違和感をそのままにしない 振り返りを丁寧にする
	保健師としての方向性、目指す姿を整理する	最終的に目指すところを明確にする 中長期目標を明確にする
	保健所保健師の役割を意識する	保健師の役割は様々な関係者の思いを汲み取り調整すること 関係者全体をみて役割を調整する

## 考察

### I 県中堅保健師が行う地域特性に応じた事業展開における課題

本研究の結果、県中堅保健師の地域特性に応じた事業展開は、「P：計画」段階で周囲の声や前任者からの引き継ぎ等に基づいて計画を進めている中、【現状把握】や【目的・目標の設定】を課題と捉えていることが分かった。成果や効果にあまり興味を持たずに、前例踏襲で改善されない計画を延々と繰り返すことは、Check(評価)とAction(改善)が機能不全に陥っている(中板, 2013)と指摘されているように、県中堅保健師はこの状況に陥っている可能性がある。一方で、市町村と異なり、県は3年程度で異動があり、地域特性を理解しないまま、前任から引き継いだ計画を見直し・評価せず進めざるえない現状があるとも考えられる。また、行政保健師が対応するケースは複雑であることや事務量の多さから、十分な活動ができていないと認識する保健師が多い(日本看護協会, 2016)。このような背景の中で、地域を知りたい気持ちがあっても難しい現状があり十分に活動できていないという認識につながると考えられる。

「D：実施」段階では、特に【関係機関・関係者との連携】に関する課題が多かった。保健師の活動においては、個人や地域における多様で複雑困難な課題に対応するため、地域保健福祉関係機関はもとより、その他の関連分野の機関とも密接な連携を図ることが重要である(地域における保健師の保健活動検討会, 2013)。本研究で検討した事例はすべて多機関の関係者との密接な連携が求められていることから、県中堅保健師は日々の活動において【関係機関・関係者との連携】を課題と捉えていると考える。さらに、事業を展開するうえで、「P：計画」段階の【現状把握】や【目的・目標の設定】が解決していないことが、【関係者・関係機関との連携】の課題へとつながっていると考えられた。

「C：評価」段階では【実施した結果の整理・表現】【評価方法】が抽出され、実施まではできていても評価が曖昧になっている状況がみられていた。今井(2016)は、PDCA サイクルの中で最も重要な段階は Check(評価)でありサイクルの基軸となり、この段階で実施すべき作業を行えばサイクルは円滑に回ると述べている。評価が不十分なためにサイクルは円滑に回らず、事業の成果も見えないこととなり、活動に自信を持てなくなるのではないかと考えられる。

「A：改善」では、県中堅保健師は、PDC 段階で出された課題の解決につながる【現状整理を丁寧に行う】【関係者と目指す姿を共有する】ことを課題と捉えていた。PDCA サイクルの悪循環を断ち切るためには Plan(計画)の段階に思い切って戻り、必要な情報を集め、適切に分析・評価する工程を

行うことが一つの方策であると指摘されている(中板, 2013). 本研究では、「P:計画」段階で解決すべき課題が多く、県保健師は「P:計画」を丁寧に行うことが重要であると考えます。また、【保健師として目指す方向を明らかにする】【保健師の役割を意識する】という課題から、保健師は自分の役割を明確にして事業を展開する必要性が示唆された。

## II 県中堅保健師への今後の支援のあり方について

今回の事例検討会は、研究者らが活動を振り返ることで、様々な気づきを得て、事例提供者それぞれの課題を明確にすることができた。内山ら(2013)はリフレクションを促すためにはありのままの自分を出出できるような場の醸成が必要であると述べている。今回は、同年代で職場の異なる保健師が「指導」「評価される」ことなく、気兼ねなく発言できた。また、様々な意見を聞くことができ、リフレクションが促進されたと考える。小川ら(2012)は、保健師が職務への自信を獲得するためには経験を積み重ねるだけでなく、事例や事業を検討して評価し合う職場の教育体制が重要であると述べている。本研究で行った事例の検討会は、今後 Off-JT の一つとして取組んでいくこととともに、OJT(職場内研修)として取組んでいくことも重要ではないかと考えられる。県中堅保健師の支援として、職場内外で事例検討の機会を持つことが今後必要であると示唆された。

## 結論

県中堅保健師が事業展開するうえで【P:計画】段階で“現状把握”に関する内容等の課題が多く、この課題が次の段階以降の課題にもつながり、PDCA サイクルがうまくまわせない状況にあると考えられた。県中堅保健師が地域特性に応じた事業展開をするうえで、【P:計画】段階で現状把握の必要性を理解し、丁寧に課題整理等を行うことが必要であるとともに、それをサポートできるような職場内外での環境づくり等の必要性が示唆された。

## 引用文献

- 今井博久(2016):「評価」するということ PDCA サイクルを活用する視点から、保健師ジャーナル, 第 72 巻第 9 号, 723-727.
- 内山研一, 鈴木聡(2013):看護におけるアクションリサーチに期待されること, 看護管理, 第 23 巻第 5 号, 376-385.
- 小川智子, 中谷久恵(2012):行政保健師の職務への自信とその影響要因, 日本公衆衛生学会誌, 第 59 巻第 7 号, 457-465.
- 厚生労働省健康局長通知(2013):地域における保健師の保健活動について, 健発 0419 第 1 号.
- 地域における保健師の保健活動検討会(2013):平成 24 年度地域保健総合推進事業 地域における保健師の保健活動報告書.
- 中板育美(2013):地区診断からはじまる保健師の地区活動, 保健師ジャーナル, 第 69 巻第 2 号, 96-103.
- 日本看護協会(2016):平成 26 年度厚生労働省先駆的保健活動交流推進事業 保健師の活動基盤に関する基礎調査報告書, 74-75.